

もう一度初めから その2

鴨長明『方丈記』の一節です。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。
世の中にある人と棲(すみか)と、又かくの如し。

現代語訳

流れる川の流れは絶え間ないが、しかし、その水はもとの水ではない。
よどみの水面に浮かぶ泡は消えては生じ、そのままの姿で長くとどまっているというためしはない。
世の中の人と住まいも、これと同じなのだ。

『方丈記』では、大きな厄災である大地震について、このように記述している。

山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。
渚漕ぐ舟は浪にただよひ、道ゆく馬は足の立(たち)どをまどはせり。都のほとりには、在々所々、堂舎廟塔(だうじやたふめう)一つとして全からず。
或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ちのぼりて、盛(さかり)なる煙のごとし。
地の動き、家の破るる音、雷(いかづち)にことならず。
家の中に居れば忽(たちまち)にひしげなんとす。走り出づれば、地割れ割く。
羽なければ空をも飛ぶべからず。
龍ならばや雲にも乗らむ。恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとぞ覚え侍(はべ)りしか。

現代語訳

都の周りではあちこちの寺のお堂や塔が崩壊して、無事なもの一つもない。あるものは崩れ、あるものは倒れた。塵や灰が舞い上がって煙が立ち上っているようである。

大地が鳴り響き、家々がバリバリと崩壊していく音は、雷鳴が轟くゆな凄まじさだ。

家の中にいけば押しつぶされそうになり、外へ逃げれば地面が割れ逃げ道をふさがれる。

羽がないので空を飛ぶこともできない。

龍であれば雲に乗って逃げることも出来るのに。恐ろしいものの中でも、もっとも恐ろしいのは、他でもない地震であったとつくづく思った。

さながら、今回の大水害の災害にも、似たような世界が広がっていたことを思い出す。人の命を奪って、住むところを奪って、引いた後のその景色は、泥に覆われ、ボロボロになった街の景色であった。

高校生たちは、勇敢であった。自分たちの町のこととして、一步も二歩も、先に歩いていました。いわきにも人が育っていると感じました。

人皆あぢきなきことを述べて、いささか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり年経にし後は、言葉にかけて言ひ出づる人だになし。

現代語訳

人は皆、やるせない世の中を嘆いていくらかは煩惱も薄らぐようにも見えたが、地震から月日が経ち時が過ぎると、もう言葉にして口にすると人さえない。

人の営み皆愚かなるなかに、さしもあやうき京中の家を作るとて、宝を費やし心をなやます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

現代語訳

災いの多い京中に大金をかけて住まいを作って、その為にいらぬ心配に神経をすり減らす、これほど馬鹿馬鹿しいことはない。だから私はそういうものに対していっさい価値を置かない。

方丈記の結びには、よくよく考えさせられることが含まれております。